

【シリーズ「みんなで未来へ」】
～ 安心の設計 60過ぎて働くワケ～

技術者経験生かす



「いろいろな人と仕事ができるのが魅力」と語る村本さん(中央)(昨年12月13日、千葉県白井市で)

千葉県白井市にある国道16号沿いの工事現場。2020年に、延べ床面積約6万平方メートルの4階建て倉庫が完成する予定だ。ここで先月13日、地層を調べる長さ35メートル、太さ70センチの杭を打つ作業が行われた。「図面通りに杭を打っているか?」「明日は杭番号201から打っていきましょう。土木技術者の村本道夫さん(74)の声が、広げた図面を前に響いた。

1963年、富山県から上京して千葉工業大学の土木工学科に入学。東京五輪の前年、あらゆる所で大規模工事が行われていた。「こんな活気のある場所で働きたい」。卒業後、ゼネコン「大豊建設」(東京)に入った。

74歳 @建設現場

初日の4月1日、江戸川にかかる総武線の橋の工事現場に配属された。寝泊まりするのは、橋のたもとにある事務所2階。電車が橋を渡る度にガタガタ……。「これは危険な仕事だ」と実感した。その後は土木畑一筋。様々な現場に出向いた。海拔が低く、浸水しやすい地域で行った下水道敷設工事は、ほかの

ゼネコンが受注しないほどの難工事。それを9年かけて完成させると、住民から感謝された。「技術が実を結んだ工事。技術者冥利に尽きた」60歳の定年を迎えた時は、東京都の環状6号のトンネルに換気所を作る工事の作業所長だった。ただ工事は途中。「やり遂げたい」。会社からも「定年を延長してほしい」と求められ、嘱託社員として働き続けることが決まった。

あれから15年、今も現場に立ち続けるが、周りにはいるのは、息子くらいの年齢の所長や若手作業員たち。仕事の進め方も大きく変わった。現場の図面は手書きからパソコンに。現場の写真をLINEで共有して、打ち合わせをするのも少なくなっている。「自分で勉強したり若手に教わったりして、何とか使いこなしているよ」と笑いながら、こう振り返った。「この仕事は、やればやるほどノウハウが蓄積されていく。いろいろなものを作ることができた会社員人生は充実しているなあ」

取材の様子 その



取材の様子 その



取材の様子 その

